授業研究を主軸とした校内研修の改善
－　読解力の向上を目指す授業づくりを通して　－

学籍番号　229124
氏　　名　松谷　千春
主指導教員　木原　俊行
副指導教員　田中　満公子

1．K中学校の校内研修の現状と課題

筆者は令和4年度より，K中学校で研究主任を務めることとなった。研究主任として校内研修を企画・運営するにあたり，過去の校内研修について分析したところ，所属校では校内研修が計画的に行われてこなかったことが明確になった。校内研修の内容についても，授業づくりに関するものはほとんど実施されてこなかった。そこで，本研究では，筆者が研究主任という立場から，2年間を通して授業研究を主軸とした校内研修を定着させることを目指すこととした。そのためには，筆者が1人で動くのではなく，筆者を含む教育研究係が校内研修を組織的に企画・運営を行っていく体制が必要であると考えた。

また，令和4年度から，所属校の位置するY市では，全市的に読解力向上を目指す取り組みを進めることとなり，所属校の学校経営方針にも「読解力の向上を図る」と明記されることとなった。このことから，読解力向上を授業研究のテーマとし，PISA型読解力の読解プロセスである「取り出し」「解釈」「熟考・評価」を意識した授業づくりに取り組むこととなった。

2．校内研修の改善に向けた試行

まずは，令和4年度，授業研究会を含む校内研修の年間計画を策定した。それには，2回の授業研究会と1ヶ月間の授業交流会を設定した。第1回授業研究会では，筆者が読解プロセスの「取り出し」と「解釈」の学習場面を取り入れた授業を研究授業として公開した。初めての研究討議会であったにもかかわらず，活発な意見交流を行うことができた。この研究授業をもとに，11月の第1回授業交流会では，4人の教員が「読解力」の育成に関わる授業を公開した。2月には，第2回授業研究会として，「熟考・評価」の学習場面を取り入れた保健体育科の研究授業が行われた。これもまた活発な研究討議会となった。2回の授業研究会を通して，教員は，ねらいにそった討議を学年や教科をこえて繰り広げることができた。そして，少しずつではあるが，「読解力」や「取り出し」などの言葉が職員室で交わされるようにもなった。一方で，研究テーマが所属校の生徒の課題にあったものなのかという意見も出てきた。年度末には，教育研究係で生徒の現状と課題について話し合い，令和5年度の研究テーマと校内研修の年間計画を策定した。研究主任が中心となって動くことが多かったことから，令和5年度は教育研究係でより組織的に取り組むことを決めた。

3．校内研修の本格的改善

令和4年度末に策定した研究テーマと年間計画をもとに，校内研修を実施した。校内研修を組織的に企画・運営するために，教育研究係の組織図を作成し，各人の役割を明らかにした。各回の校内研修において，筆者とその回の担当者が企画・運営に携わることとした。また，令和4年度の授業研究会にはなかった指導案検討会を研究授業の授業者と教育研究係の担当者で実施した。教育研究所の指導主事派遣も要請した。研究討議会でのグループ討議の方法についても，教育研究係の担当者から「『えんたくん』を使ってはどうか」「ラウンドスタディの手法を取り入れたい」と提案があった。6月の第3回授業研究会では，国語科で「熟考・評価」の学習場面を取り入れた研究授業を実施した。研究討議会では，教育研究係の担当者が司会進行を行った。9月には第2回授業交流会を実施した。各教科で公開授業をする教員を１人以上決めてもらうことで，公開授業の授業者が9名に増え，読解力向上の視点を取り入れた授業の実践が増えた。しかし，公開授業が40時間に増えたにも関わらず，参観した人数は20名と，令和4年度と比べて変化がなかった。11月には第4回授業研究会として，社会科で「取り出し」「解釈」の学習場面を取り入れた研究授業が実施された。それ以前に読解プロセスに対応した学習活動がわかりにくいという声があったことから，授業者に「取り出し」「解釈」について参観者が理解しやすい学習場面を設定した授業を依頼し，実践してもらった。この研究授業に関わる研究討議会でも，教育研究係の担当者が司会進行を担った。担当者が計画した研究討議会に関するアンケートによると肯定的評価が多かった。それゆえ，筆者以外の教員でも研究討議会の企画・運営ができるようになったと言える。

4．2年間の校内研修についての評価

2年間の校内研修の改善に関わる総括的評価として，全教員を対象に令和5年度の校内研修に関するアンケート調査を行った。アンケートから，校内研修を組織的・計画的に実施できていることが確認された。また，校内研修を「学ぶものが多い」「面白い」「有意義であった」と前向きに捉える意見があった。特に，「校内研修での学びを今後に活かしたい」という意見からは，2年間の校内研修を通して，校内研修と日常の授業の結びつけることができたことがわかる。

これらのアンケートの回答結果をもとに行った教育研究係の省察では，学校として，校内研修に対する否定的な意見や消極的な雰囲気がなくなったという共通理解に至った。学校長へのインタビューでは，これらの捉え方は間違っていないこと，2年間の校内研修を通して教員の研修に対する抵抗感が減ったと感じることが示された。

5．K中学校の校内研修の更なる発展

2年間の研究を通して，K中学校の教員にとって，年2回の授業研究会は恒例のものとなり，授業を相互に参観することにも抵抗が小さくなった。この校内研修の文化を継承しつつさらに発展させていく必要があると考える。そこで，令和6年度には全教員が読解力向上の視点を取り入れた授業の実践ができることを目指す。また，令和7年度には校外の授業研究会に参加し，その学びを持ち帰り，自校で発信できることを目指す。それらの発展等を基軸とする，令和9年度までの校内研修の中期計画案と，間近にせまった令和6年度の年間計画案を提案する。